

国産牛肉、輸出1割高

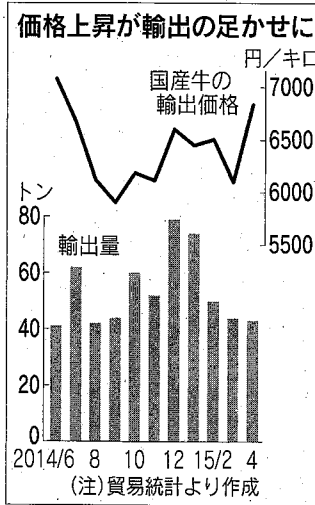
4月 牛不足、輸出量鈍化も鮮明

国産牛肉の輸出価格が大幅に上昇している。4月は前月比で1割強高い。全国的に牛が足りておらず、各地で子牛の取引価格が最高値圏にあるほか、国内の牛肉の流通価格も高止まりしている。新年度に入り輸出価格に転嫁する動きが相次いでいる。円安の進行で輸出を拡大したいところだが、輸出量の鈍化傾向も鮮明になってきた。

国内流通価格 高止まり

4月の牛肉（冷凍）の輸出価格は直近の安値だった3月と比べて12%高の1キログラム6837円となった。高値が続く米国产牛肉の2倍近い価格だ。食肉卸ミートコンパニオンの植村光一郎常務は「国内で牛の出荷頭数が少ないためか、かからない要因も

ある。例えば黒毛和種の子牛の取引数は12年の36万頭から14年に33万頭に減った。15年も減少が続き、1頭あたりの取引価格（雄雌の平均）は4月時点で前年同月比14%高の63万円と高値が目立つ。国内で最も早く米国向けの牛肉輸出を始めたといわれる南九州畜産興業（鹿児島県吉於市）は「国内で牛の取り合いが激しく、海外顧客にも値上げしないとコスト増を抱えきれない」という。円安が進んでいるが価格を下げ、輸出を伸ばす動きはとりにくい。日本からの



化学肥料、1.8%値上げ

6~10月 原料輸入コスト高反映

化学肥料の国内価格が2期連続で上昇している。全国農業協同組合連合会（全農）は29日、6~10月期の代表的な肥料の反応を示す「一般品」が指標品種にな

安進行で化学肥料メーカーの原料調達コストが上昇したことを反映した。窒素、リン酸、カリウムの主要3種類の肥料成分を混ぜた「高度化成（一般品）」が指標品種にな

値上がり傾向（大手商社）にあるが、窒素は中東などで新しい生産設備が立ち上がり国際価格が下落している。3種類を総合すると円安もあって輸入コストの負担が重くなっているという。肥料メーカーも全農側に価格の引き上げを求めた。国内肥料の販売期間は秋肥（6~10月）と春肥

牛肉（冷凍）輸出は1月の74トから徐々に減り、4月は43トだった。生産者はコスト高でも収益の確保に知恵を絞る。富裕層の多い国や地域に対し、ブランド品として売り込みをかけている。輸出価格はアラブ首長国連邦（UAE）向けが4月に前月比で2倍近い

1キログラム1万1029円となった。の7668円となった。政府は牛肉の輸出を12年の約51億円から、20年には5倍の250億円に拡大する目標を掲げている。飼料用米の増産をさらに促すため、生産計画書の提出期限を従来の6月末から7月末に延長することも決めた。各都道府県に聞き取り調査した。農水省は主食用米の需給

野菜卸値2割以上高く

野菜の卸値はしばらく高見通しによると、消費量の値が続く見通しだ。農林水産省が29日発表した6月の野菜卸値は13品目、後半は6品目が半年より2割以上高くなる見通し。4月上旬の日照不足と下旬以降の雨不足の影響が残り、生育の遅れや品質低下が見

6月見通し、雨不足影響残る

キャベツは6月前後半とも平年比2割以上の高値になる見通しだ。干葉菜などに雨不足の影響が残る。東京・大田市場での足元の卸値（相対取引・中値）も1080円と、前年の同時期に比べ4割高い。6月には生育の順調な群馬産などの出荷が始まるが、本格的な出荷は7月以降だ。タマネギやジャガイモも平年比2割以上の高値が続



キャベツは高値が続く見通し

（11~5月）に分かれる。域農協などを通じて農家の生産コストの1割弱を金農は購入した肥料を地に販売する。肥料は農家が占めるとされる。

アルミ割増金58%下げ打診

リオ・ティント・アルミと日本の加工業者に対し、現物調達の際にロンドン・カンパニーは29日、中国の輸出攻勢による需給緩和を背景に、前の四半期から58%の大幅な割増金を1ト当たり160ト程度にする

江崎社長 退任表明

ホルム